

障発第0620263号  
平成13年6月20日

最 終 改 正  
障発0928第1号  
平成23年9月28日

都道府県知事  
各 指定都市市長 殿  
中核市市長

厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部長

### 障害者(児)ホームヘルパー養成研修事業の実施について

身体障害者ホームヘルプサービス事業及び障害児・知的障害者ホームヘルプサービス事業（以下「障害者(児)ホームヘルプサービス事業」という。）については、障害者プランに基づき、その充実を図っているところであるが、身体障害者及び障害児・知的障害者（以下「障害者(児)」という。）の、身体介護を中心とする介護ニーズに的確に対応していくためには、障害者(児)ホームヘルパーの更なる量的、質的充実を図っていくことが求められている。

このため、障害者(児)に派遣される障害者(児)ホームヘルパーの養成を更に推進する観点から、新たに別添のとおり「障害者(児)ホームヘルパー養成研修事業実施要綱」（以下「実施要綱」という。）を定めたので、本事業の円滑な実施及び関係市町村に対する本事業の趣旨の徹底について特段のご配慮をお願いする。

本通知の施行に伴い「ホームヘルパー養成研修事業の実施について」（平成7年7月31日社援更第192号・老計第116号・児発第725号 厚生省社会・援護局長、厚生省老人保健福祉局長、厚生省児童家庭局長連名通知。以下「旧通知」という。）は廃止する。

ただし、本事業の実施体制の整備に要する期間を考慮し、平成13年度中については、なお従前の例によることができるものとする。

別添

## 障害者(児)ホームヘルパー養成研修事業実施要綱

### 1 目的

障害者(児)の増大かつ多様化するニーズに対応した適切な居宅介護等を提供するため、必要な知識、技能を有する居宅介護従業者等の養成を図ることとする。

### 2 実施主体

実施主体は、都道府県とする。

ただし、事業の一部又は全部を適当と認められる講習機関等に委託することができるものとする。

### 3 対象者

原則として、居宅介護、重度訪問介護、同行援護又は行動援護に従事することを希望する者、従事することが確定している者又は既に従事している者とする。

### 4 研修カリキュラム

(1) 本研修は、居宅介護従業者養成研修1級課程(以下「1級課程」という。)、居宅介護従業者養成研修2級課程(以下「2級課程」という。)、居宅介護従業者養成研修3級課程(以下「3級課程」という。)、重度訪問介護従業者養成研修基礎課程、重度訪問介護従業者養成研修追加課程、同行援護従業者養成研修一般課程、同行援護従業者養成研修応用研修、行動援護従業者養成研修課程、日常生活支援従業者養成研修課程(平成18年9月30日までに開始されたものに限る。)及び継続養成研修の8課程とし、各課程のカリキュラムについては「指定居宅介護等の提供に当たる者として厚生労働大臣が定めるもの」(平成18年厚生労働省告示第538号。以下「告示」という。)第2条により読み替えられた「介護保険法施行規則第二十二條の二十三第二項に規定する厚生労働大臣が定める基準」(平成18年厚生労働省告示第219号。)(以下「介護保険告示」という。)別表第2から第4及び告示別表第1から第5並びに本通知の別紙のとおりとする(平成18年9月30日までに開始されたものにあつては「指定居宅介護等の提供に当たる者として厚生労働大臣が定めるもの」(平成18年厚生労働省告示第209号。以下「旧告示」という。)別表第1から第3及び別表第7並びに本通知の別紙のとおりとする。)

ただし、地域性、受講者の希望等を考慮して、必要な科目、時間の追加及びより詳細な基準を定めることは差し支えない。

なお、居宅介護従業者養成研修の各課程は、平成18年10月1日から三障害共通の研修課程とされていることに留意すること。

(2) 各課程の位置付け等は次のとおりとする。

## ア 1級課程

2級課程において取得した知識及び技術を深めるとともに、主任居宅介護従業者（居宅介護従業者のうち、他の保健医療サービス又は福祉サービスを提供する者との連絡調整、他の居宅介護従業者に対する指導、監督その他の居宅介護を適切かつ円滑に提供するために必要な業務を行うものをいう。）が行う業務に関する知識及び技術を修得することを目的として、2級課程を修了した者を対象として行われるものとする。

## イ 2級課程

2級課程は居宅介護従業者が行う業務に関する知識及び技術を修得することを目的として行われるものとする。

## ウ 3級課程

3級課程は居宅介護従業者が行う業務に関する基礎的な知識及び技術を修得することを目的として行われるものとする。

## エ 重度訪問介護従業者養成研修基礎課程

重度訪問介護従業者養成研修基礎課程は、重度の肢体不自由者であって常時介護を要する障害者等に対する入浴、排せつ及び食事等の介護、調理、洗濯及び掃除等の家事並びに外出時における移動中の介護に関する基礎的な知識及び技術を習得することを目的として行われるものとする。

## オ 重度訪問介護従業者養成研修追加課程

重度訪問介護従業者養成研修追加課程は、基礎課程において修得した知識及び技術を深めるとともに、特に重度の障害者に対する緊急時の対応等に関する知識及び技術を修得することを目的として、基礎課程を修了した者を対象として行われるものとする（ただし、基礎課程と追加課程を適切な組み合わせにより同時並行的に行われる場合はこの限りではない。）。

## カ 同行援護従業者養成研修一般課程

同行援護従業者養成研修一般課程は、視覚障害により、移動に著しい困難を有する障害者等に対して、外出時に、当該障害者等に同行して、移動に必要な情報を提供するとともに、移動の援護、排せつ及び食事等の介護その他の当該障害者が外出する際に必要な援助に関する一般的な知識及び技術を習得することを目的として行われるものとする。

## キ 同行援護従業者養成研修応用課程

同行援護従業者養成研修応用課程は、一般課程において修得した知識及び技術を深めるとともに、特により深い障害及び疾病の理解や場面別における同行援護技術等を習得することを目的として、一般課程を修了した者を対象として行われるものとする。（ただし、一般課程と応用課程を適切な組み合わせにより同時並行的に行われる場合はこの限りではない。）。

## ク 行動援護従業者養成研修課程

行動援護従業者養成研修課程は、知的障害又は精神障害により行動上著しい困難を有する障害者等であって常時介護を要するものにつき、当該障害者等が行動

する際に生じ得る危険を回避するために必要な援護、外出時における移動中の介護等に関する知識及び技術を修得することを目的として行われるものとする。

ケ 日常生活支援従業者養成研修課程

日常生活支援従業者養成研修課程は、全身性の障害を有する者に対する入浴、排せつ、食事等の介護並びに調理、洗濯、掃除等の家事に関する基礎的な知識及び技術を習得することを目的として行われるものとする。

コ 継続養成研修

1級課程修了者の資質の維持、向上のために実施する次の4プログラムとし、1級課程修了者は、原則として3年を経過するごとにいずれかのプログラムを受講することとする。

(ア) チーム運営方式主任ヘルパー業務関連プログラム

(イ) 最新の知識プログラム

(ウ) 指導技術と介護技術プログラム

(エ) 困難事例対応技術プログラム

なお、継続養成研修の概要、受講対象者及び研修時間は次のとおりとする。

| 課 程        | 概 要                        | 受 講 対 象 者 | 時 間          |
|------------|----------------------------|-----------|--------------|
| 継続養成<br>研修 | 1級課程修了者の資質の<br>維持・向上に必要な研修 | 1級課程修了者   | 設定され<br>た時間数 |

5 事業実施上の基準

(1) 1級課程に係る基準

ア 1級課程については、原則として1年以内に修了することとする。

ただし、地域の実情等により、やむを得ない場合については、2年の範囲内で修了することとして差し支えない。

イ 研修の内容は、介護保険告示別表第2に定めるもの以上であること。

ウ 別表第2に定める各科目を教授するのに必要な数の講師を有すること。

エ 講師は、1級課程を教授するのに適当な者であること。

オ 別表第2に定める実習を行うのに適当な施設を実習施設として利用できること。

カ 実習施設における実習について適当な実習指導者の指導が行われること。

(2) 2級課程に係る基準

ア 2級課程については、原則として8月以内に修了することとする。

ただし、地域の実情等により、やむを得ない場合については、1年6月の範囲内で修了することとして差し支えない。

イ 研修の内容は、介護保険告示別表第3に定めるもの以上であること。

ウ 別表第3に定める各科目を教授するのに必要な数の講師を有すること。

エ 講師は、2級課程を教授するのに適当な者であること。

オ 別表第3に定める実習を行うのに適当な施設を実習施設として利用できること。

(3) 3級課程に係る基準

- ア 3級課程については、原則として4月以内に修了することとする。  
ただし、地域の実情等により、やむを得ない場合については、8月の範囲内で修了することとして差し支えない。
  - イ 研修の内容は、介護保険告示別表第4に定めるもの以上であること。
  - ウ 別表第4に定める各科目を教授するのに必要な数の講師を有すること。
  - エ 講師は、3級課程を教授するのに適当な者であること。
  - オ 別表第4に定める実習を行うのに適当な施設を実習施設として利用できること。
  - カ 実習施設における実習について適当な実習指導者の指導が行われること。
- (4) 重度訪問介護従業者養成研修基礎課程
- ア 基礎課程については、原則として1月以内に修了することとする。  
ただし、地域の実情等により、やむを得ない場合については、2月の範囲内で修了することとして差し支えない。
  - イ 研修の内容は、告示別表第1に定めるもの以上であること。
  - ウ 別表第1に定める各科目を教授するのに必要な数の講師を有すること。
  - エ 講師は、基礎課程を教授するのに適当な者であること。
  - オ 重度訪問介護事業所との連携等により、別表第1に定める実習を行うのに適当な体制を確保していること。
  - カ 実習について適当な実習指導者の指導が行われること。
- (5) 重度訪問介護従業者養成研修追加課程
- ア 追加課程については、原則として1月以内に修了することとする。  
ただし、地域の実情等により、やむを得ない場合については、2月の範囲内として差し支えない。  
また、基礎課程と追加課程を同時並行的に実施する場合にあっては、原則として2月以内に修了することとする。  
ただし、地域の実情等により、やむを得ない場合については、4月の範囲内で修了することとして差し支えない。
  - イ 研修の内容は、告示別表第2に定めるもの以上であること。
  - ウ 別表第2に定める各科目を教授するのに必要な数の講師を有すること。
  - エ 講師は、追加課程を教授するのに適当な者であること。
  - オ 重度訪問介護事業所との連携等により、別表第2に定める実習を行うのに適当な体制を確保していること。
  - カ 実習について適当な実習指導者の指導が行われること。
- (6) 同行援護従業者養成研修一般課程
- ア 修業年限は、原則として2月以内に修了することとする。  
ただし、地域の実情等により、やむを得ない場合については、4月の範囲内として差し支えない。
  - イ 研修の内容は、告示別表第3に定めるもの以上であること。
  - ウ 別表3に定める各科目を教授するのに必要な数の講師を有すること。
  - エ 講師は、一般課程を教授するのに適当な者であること。

- オ 同行援護事業所との連携等により、別表第3に定める実習を行うのに適当な体制を確保していること。
  - カ 実習について適当な実習指導者の指導が行われること。
- (7) 同行援護従業者養成研修応用課程
- ア 修業年限は、原則として1月以内であること。  
ただし、地域の実情等により、やむを得ない場合については、2月の範囲内として差し支えない。  
また、一般課程と応用課程を同時並行的に実施する場合にあっては、原則として3月以内であること。  
ただし、地域の実情等により、やむを得ない場合については、6月の範囲内として差し支えない。
  - イ 研修の内容は、告示別表第四に定めるもの以上であること。
  - ウ 別表4に定める各科目を教授するのに必要な数の講師を有すること。
  - エ 講師は、応用課程を教授するのに適当な者であること。
  - オ 同行援護事業所との連携等により、別表第四に定める実習を行うのに適当な体制を確保していること。
  - カ 実習について適当な実習指導者の指導が行われること。
- (8) 行動援護従業者養成研修課程
- ア 行動援護従業者養成研修課程については、原則として2月以内に修了することとする。  
ただし、地域の実情等により、やむをえない場合については、4月の範囲内で修了することとして差し支えない。
  - イ 研修の内容は、告示別表第5に定めるもの以上であること。
  - ウ 別表第5に定める各科目を教授するのに必要な数の講師を有すること。
  - エ 講師は、行動援護従業者養成研修課程を教授するのに適当な者であること。
  - オ 演習は、適当な実習指導者の指導の下に、行動援護に関する実習を行うことでも差し支えない。
- (9) 日常生活支援従業者養成研修課程に係る基準
- ア 日常生活支援従業者養成研修課程については、原則として2月以内修了することとする。  
ただし、地域の実情等により、やむを得ない場合については、4月の範囲内で修了することとして差し支えない。
  - イ 研修の内容は、旧告示別表第7に定めるもの以上であること。
  - ウ 旧告示別表第7に定める各科目を教授するのに必要な数の講師を有すること。
  - エ 講師は、日常生活支援従業者養成研修課程を教授するのに適当な者であること。
  - オ 演習は、適当な実習指導者の下に、施設における介護実習や居宅介護に関する実習を行うことでも差し支えない。
- (10) 継続養成研修については、原則として3月以内に修了することとする。

## 6 修了証明書の交付等

- (1) 都道府県知事は、研修修了者に対し、「居宅介護従業者養成研修等について」（平成〇〇年〇〇月〇〇日障発第〇〇〇〇〇〇〇号厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部長通知）に定める別記様式（1）又は（2）に定める様式に準じ修了証明書及び修了証明書（携帯用）を交付するものとする。
- (2) 都道府県知事は、研修修了者について、修了証書番号、修了年月日、氏名、生年月日、年齢等必要事項を記載した名簿を作成し、管理すること。  
なお、平成18年4月以前の研修修了者等、告示の対象となる者についても、同様の取扱いとする。

## 7 研修会参加費用

研修会開催費用のうち、教材等にかかる実費相当分については、参加者が負担するものとする

## 8 事業実施上の留意事項

- (1) 都道府県知事は、本事業の実施に当たって、福祉人材センター、福祉人材バンク等との十分な連携を図るものとする。
- (2) 都道府県知事は、現に居宅介護従業者等として活動している者のうち、養成研修を受講していない者等が業務の内容に応じた資質の向上を図れるよう適切な配慮を行うものとする。
- (3) 研修の実施に当たっては、テキストに加え、副読本の活用や視聴覚教材の活用等を図るものとする。

別紙 1

障害者（児）ホームヘルパー養成研修カリキュラム

1 1級課程 合計 230 時間

(1) 講義 計 84 時間

ア 社会福祉関連の制度とサービス 小計 20 時間

- (ア) 障害者（児）福祉の制度とサービス 4 時間
- (イ) 老人福祉の制度とサービス 4 時間
- (ウ) 老人保健・医療の制度とサービス 3 時間
- (エ) 社会保障制度 3 時間
- (オ) 障害者（児）福祉の動向 3 時間
- (カ) 老人保健福祉の動向 3 時間

イ 介護の方法と技術 小計 28 時間

- (ア) 介護技術の展開 4 時間
- (イ) 障害を持つ児童の介護の実際 4 時間
- (ウ) 身体障害者の介護の実際 4 時間
- (エ) 知的障害者の介護の実際 4 時間
- (オ) 精神に障害を持つ人々への介護の実際 3 時間
- (カ) 痴呆性高齢者の介護の実際 3 時間
- (キ) 困難事例検討 4 時間
- (ク) 在宅ターミナルケアの実際 2 時間

ウ チームケアとチームワーク 小計 20 時間

- (ア) ケアマネジメントの方法 4 時間
- (イ) ホームヘルプサービスチーム運営方式の実際 4 時間
- (ウ) チームケアの実際 4 時間
- (エ) 指導業務の必要性と方法 4 時間
- (オ) カンファレンスの持ち方と事例検討の方法 4 時間

エ 関連領域の基礎知識 小計 16 時間

- (ア) 医学の基礎知識Ⅱ 8 時間
- (イ) 在宅看護の基礎知識Ⅱ 4 時間
- (ウ) 心理学的援助方法の基礎知識 4 時間

(2) 実技講習 計 62 時間

- ア ケアマネジメント技術 6 時間
- イ 指導技術と介護技術の向上 30 時間
- ウ 困難事例等対応技術 20 時間
- エ 福祉用具の使用技術 6 時間

(3) 実習 計 84 時間

- ア 処遇困難事例対応実習 24 時間
- イ デイサービスセンター実習 12 時間



- ウ チーム運営方式業務実習 16 時間
- エ 訪問看護同行訪問 8 時間
- オ 相談支援事業に係る職員との同行訪問 4 時間
- カ 在宅介護支援センター職員との同行訪問 4 時間
- キ 公的関係機関見学 8 時間
- ク 事例報告の検討 8 時間

2 2級課程 合計 130 時間

(1) 講義 計 58 時間

- ア 福祉サービスの基本視点 小計 6 時間
  - (ア) 福祉理念とケアサービスの意義 3 時間
  - (イ) サービス提供の基本視点 3 時間
- イ 社会福祉の制度とサービス 小計 6 時間
  - (ア) 障害者(児)福祉の制度とサービス 3 時間
  - (イ) 老人福祉の制度とサービス 3 時間
- ウ ホームヘルプサービスに関する知識 小計 5 時間
  - (ア) ホームヘルプサービス概論 3 時間
  - (イ) ホームヘルパーの職業倫理 2 時間
- エ サービス利用者の理解 小計 14 時間
  - (ア) 障害・疾病の理解 8 時間
  - (イ) 障害者(児)、高齢者の心理 3 時間
  - (ウ) 障害者(児)、高齢者等の家族の理解 3 時間
- オ 介護に関する知識と方法 小計 11 時間
  - (ア) 介護概論 3 時間
  - (イ) 介護事例検討 4 時間
  - (ウ) 在宅・福祉用具に関する知識 4 時間
- カ 家事援助に関する知識と方法 小計 4 時間
  - (ア) 家事援助の方法 4 時間
- キ 相談援助とケア計画の方法 小計 4 時間
  - (ア) 相談援助とケア計画の方法 4 時間
- ク 関連領域の基礎知識 小計 8 時間
  - (ア) 医学の基礎知識 I 3 時間
  - (イ) 在宅看護の基礎知識 I 3 時間
  - (ウ) リハビリテーション医療の基礎知識 2 時間

(2) 実技講習 計 42 時間

- ア 共感的理解と基本的態度の形成 4 時間
- イ 基本介護技術 30 時間
- ウ ケア計画の作成と記録、報告の技術 5 時間
- エ レクリエーション体験学習 3 時間

(3) 実習 計 30 時間

- ア 介護実習 16 時間
- イ ホームヘルプサービス同行訪問 8 時間
- ウ 在宅サービス提供現場見学 6 時間

3 3 級課程 合計 50 時間

(1) 講義 計 25 時間

- ア 社会福祉に関する知識 小計 7 時間
  - (ア) サービス提供の基本視点 3 時間
  - (イ) 障害者（児）福祉の制度とサービス 2 時間
  - (ウ) 老人福祉の制度とサービス 2 時間
- イ ホームヘルプサービスに関する知識と方法 小計 13 時間
  - (ア) ホームヘルプサービス概論 3 時間
  - (イ) サービス利用者の理解 3 時間
  - (ウ) 介護概論 3 時間
  - (エ) 家事援助の方法 4 時間
- ウ 関連領域の基礎知識 小計 5 時間
  - (ア) 医学の基礎知識 3 時間
  - (イ) 心理面への援助方法 2 時間

(2) 実技講習 計 17 時間

- ア 共感的理解と基本的態度の形成 4 時間
- イ 介護技術入門 10 時間
- ウ ホームヘルプサービスの共通理解 3 時間

(3) 実習 計 8 時間

- ア 在宅サービス提供現場見学 8 時間

4 継続養成研修

(1) チーム運営方式主任ヘルパー業務関連プログラム 24 時間

ア 1 級課程の科目のうち、

① 講義

ホームヘルプサービスチーム運営方式の実際(4 時間)、チームケアの実際(4 時間)、指導業務の必要性と方法(4 時間)、カンファレンスの持ち方と事例検討の方法(4 時間)

② 実技講習

ケアマネジメント技術(6 時間)

イ 小グループによる討論(2 時間)

(2) 最新の知識プログラム 22 時間

ア 1 級課程の科目のうち、

① 講義

障害者（児）福祉の動向（3時間）、老人保健福祉の動向（3時間）、介護技術の展開（4時間）、心理学的援助方法の基礎知識（4時間）

② 実技講習

ケアマネジメント技術（6時間）

イ 小グループによる討論（2時間）

（3）指導技術と介護技術プログラム 32 時間

ア 1級課程の科目のうちの実技講習

指導技術と介護技術の向上（30時間）

イ 小グループによる討論（2時間）

（4）困難事例対応技術プログラム 26 時間

ア 1級課程の科目のうちの実習

処遇困難事例対応実習（24時間）

イ 小グループによる討論（2時間）

## 別紙2

### 障害者（児）ホームヘルパー養成研修事業免除科目及び時間

#### 1 講義

- (1) サービス提供の基本視点 (3時間)
- (2) ホームヘルプサービス概論 (3時間)
- (3) 介護概論 (3時間)
- (4) 家事援助の方法 (4時間)

#### 2 実技講習

- (1) 共感的理解と基本的態度の形成 (4時間)
- (2) レクリエーション体験学習 (3時間)

#### 3 実習

- 在宅サービス提供現場見学 (6時間)